黒藪豊子氏の作文（綴り方）教育実践について

国語科教育教室　菅　原　　稔

一

黒藪豊子氏（1931〜）は，兵庫県西部地域（揖保（いぼ）郡・宍粟（しそう）郡）で，戦後一貫して，文集を中心とした作文（綴り方）教育に取り組み，すぐれた実践の成果を発表して来られた方である。

黒藪豊子氏の手になる文集を，その刊行年代順に取り上げると，下の表のようになる。

	文集の名称	号	学年	勤務校
昭和25年	なかよし	1〜3号	2年	揖保郡伊勢村立伊勢小学校
26年	〃	4〜6号	3年	〃
27年	めだか	1〜3号	3年	揖保郡新宮町立新宮小学校
28年	ことり	1〜2号	1年	〃
29年	おともだち	1〜4号	1年	揖保郡揖保川町立半田小学校
30年	〃	5号	2年	〃
31年	おひさまの子	1〜3号	1年	〃
32年	〃	4〜5号	2年	〃
33年	どんぐりころころ	1〜3号	1年	〃
40年〜34年	せんちょう	1〜17号		宍粟郡一宮町立繁盛小学校 千町分校
41年	なかま	1〜4号	4年	宍粟郡山崎町立河原東小学校
42年	〃	1〜4号	5年	〃
43年	どじょっこ	1〜3号	4年	〃
44年	みんながんばれ	1〜3号	2年	〃
45年	ことり	1〜3号	3年	〃
46年	あかいほっぺ	1〜3号	1年	〃
47年	えんぴつ	1〜3号	3年	〃
48年	とんぼの目	1〜2号	4年	〃
49年	おにやんま	1〜3号	3年	宍粟郡山崎町立戸原小学校
49年	ひょうたん	1〜2号	4年	〃
50年	ちいさいなかま	1〜2号	1年	〃
51年	（病気のため休職）			〃
57年	（退職）			〃

1)　2)

黒藪豊子氏が教職に就かれた昭和25年〈1950年〉から，病気のために休職された昭和51年〈1976年〉までの26年間，文集の刊行が一度も途絶えることなく続けられている。また，氏が刊行された18種類71冊の文集の総ページ数は4214ページ，掲載されている児童の作品は4722編にのぼる。

黒藪豊子氏は，文集を刊行するようになったきっかけを，次のように述べている。

「あしあとをのこせ」
はじめて教師となったとき，〝おんびき〟とあだ名のある校長にいわれた。
「あしあととは何？」
「文集を作ることもあしあと？」
「何のために？」
わからないまま歩きはじめた。
バカみたいに原紙を切った。
ねずみがかじるような音をさせて，原紙をきった。
大きなおなかをしていたときも，
山の分校で一人ぼっちだったときも，
原紙を切った。
ほんとうの教育とは何かがわかりはじめた。
教育とはすばらしい仕事だと思いはじめた。
あの〝おんびき〟，ほんとうの教育者だった。[3]

「〝おんびき〟とあだ名のある校長」とは，戦前の〝兵庫県綴方教育人連盟〟の同人であり，また，戦後〝兵庫作文の会〟の会代表をつとめた（昭和29年〈1954年〉から昭和41年〈1966年〉までの13年間）田渕初美氏のことである。

のち，黒藪豊子氏は，文集を刊行し続けることについて，次のように述べている。

何事も続けていくということは，難しい。意欲的に作っていた人も，いつしか作らなくなっていたということもよくある。特に婦人教師の場合，結婚するとやめてしまうことが多い。家でガリガリ音をさせると，嫌われるという。

わたしは，しあわせなことに，結婚することで続けられたといえる。

夫は，わたし以上にガリガリやっていたからである。わたしは，自分もガリガリやらなければ損をするような気になった。―しんどいなあ―と感じることもあったが，―夫に負けられない―と思ったりもした。わたしたちは，知らず知らずのうちに，文集づくりを競い合っていた。

「おともだち」「おひさまの子」「どんぐりころころ」いずれも一，二年生の文集であるが，若き日の苦闘のあとがしのばれる。はじめ一教師になんかなるんでなかった―と，思ったわたしが，―教師って，何とすばらしい仕事であろう―と思いだしたのは，文集づくりを通してであった。それは，子どものためばかりでなく，わたし自身のためでもあった。[4]

黒藪豊子氏にとって，文集は，作文（綴り方）教育のためにだけ刊行されるものではなかった。氏の教育実践のすべてにかかわるものとして，切りはなすことのできないものとして，26年間，刊行し続けられたのである。

黒藪豊子氏が刊行された文集は，すべて，Ｂ５版縦右開き・簡易製本（孔版印刷）であり，数枚の〝１枚文集〟を合冊したものである。

二

黒藪豊子氏の刊行された文集（18種類71冊）のうち，「どじょっこ」（昭和43年〈1968年〉度・4年生）「ことり」（昭和45年〈1970年〉度・3年生）などに，その構成・内容の典型的なものを見い出すことができる。

「どじょっこ」「ことり」の目次は，それぞれ次のようになっている[5]。

「どじょっこ」

第1号（昭43・8・6）

(1)・ぼくのねがいわたしのねがい（学級の全児童26名に数行ずつの〝願い〟を書かせた短文26編）

(2)・5時間目のはじまるチャイムがなった（同じ書き出しではじまる児童作文5編）

(3)・くわしく書こう（1人の児童の作文を〝くわしく〟書きなおさせ，はじめの作文と並記したもの2編）

(4)・計算のしかたを書いてみましょう（3題の割り算の問題を解く筋道を書いた児童作文12編）

(5)・詩のページ（児童詩24編）

(6)・日記（〝日記をずっと続けている〟3人の児童の日記2日分ずつ計6編）

(7)・あとがき・おとうさんおかあさんへ

(8)・あとがき・みんなへ

第2号（昭43・12・18）

(9)・夏休み日記（14名の児童の日記14編）

(10)・ようすが見えるように書きましょう（児童作文6編）

(11)・童話を読もう（新見南吉「あめだま」・松谷みよ子「へっぷりよめさま」・大関松三郎「虫けら」の再録）

(12)・うれしい気持ち悲しい気持ちがわかるように書こう（児童作文3編）

(13)・詩（児童詩9編）

(14)・ぼくの日記・わたしの日記（11名の児童の日記11編）

(15)・あとがき

第3号（昭44・3・22）

(16)・1969年ことしのめあて（学級の全児童に〝ことしのめあて〟を書かせた短作文26編）

(17)・詩（児童詩11編）

(18)・この詩を読んで（(17)の詩に対する感想文15編）

(19)・さまざまなくらしの中から（児童作文19編）

(20)・小見出しをつけて書こう（児童作文4編）

(21)・作文を読もう（(20)の作文に対する感想文4編）

(22)・人形劇脚本・さむがりよしおちゃん（児童の作った脚本1編）

(23)・おとうさんおかあさんへ

(24)・あとがき

「ことり」

第１号（昭45・８・17）

(1)・先生へ（教師への語りかけとして書かれた児童作文10編）

(2)・先生へ（学級の中の差別事象を訴えた児童作文２編）

(3)・わたしの思うことぼくの思うこと（(2)の作文に対する感想・意見を書いた児童作文21編）

(4)・アイスクリーム（同じ経験をした児童作文５編）

(5)・ぐんぐん書こう（児童作文９編）

(6)・詩のページ（児童詩13編）

(7)・あとがき

第２号（昭45・12・15）

(8)・ぼくのねがいわたしのねがい（児童作文３編）

(9)・おとうさんおかあさんのねがい（父兄の短作文24編）

(10)・よい詩を読もう（他校の児童の詩６編）

(11)・詩の勉強（児童詩12編，うち書き直したもの１編）

(12)・読む人によくわかるように書こう（児童作文６編）

(13)・いくまさとりちゃんがものをいった（児童作文６編）

(14)・日記（11名の児童の日記11編）

(15)・あとがき

第３号（昭46・３・22）

(16)・1971ねんのはじめに（学級の全児童に〝ことしのめあて〟を書かせた短作文24編）

(17)・冬休み日記（全児童の日記24編）

(18)・おかあさんのページ・ことり№２をよんで（母親の作文３編）

(19)・よくわかるように書こう（児童作文８編）

(20)・詩のひろば（児童詩18編）

(21)・おとうさんのページ・ことり№２をよんで（父親の作文１編）

(22)・あとがき

上の目次からも推察されるように，これらの文集は，単なる作品集・作文集としてだけではなく，表現指導・生活指導の素材を提供するものとして，また，児童・父兄・教師を結ぶ役割りを持たせるものとして，学級で作られた読みものとして，多様な機能を持たされるように工夫されている。

また，目次のことばから，それぞれの〝１枚文集〟が，どのような意図をもって編集されたかをうかがうことができる。目次のことばは，また，読み手の児童に，それぞれ〝１枚文集〟に取り上げられている作品を，どのような視点で読むべきかを，示している。

文集に取り上げられている児童の作品の１つ１つに，黒藪豊子氏の〝評語〟が添えられている。それは，脚注の形をとっているものと，文末におかれているものとの，２つに大別できる。

いま，脚注の形式をとって指導者のことばの添えられているものを，例として取り出すと，次のようなものである。

ずぶぬれになったこと　　藤井たか子

にわで，ボールを受けるれんしゅうをしてあそんでいると，いき|

おいよくボールがとんで，川へおちました。

わたしは，ボールのながれといっしょに走っていきました。すると，やすあきくんとこの川のしものところにとまってしまいよった。わたしが石をなげると，ボールはながれました。それで，わたしは，おくまん走って，ようじろうくんとこのあらいばのところへ行って，まっていたら，また，しげきちゃんとこのはしのところでとまってしまいました。わたしは，いもうとに，

「石なげてー」

と，いいました。いもうとは，はじめ小さい石をなげていましたが，しまいには，大きな石をなげました。すると，ダブーといって，ボールがながれてきました。

わたしは，川へはいって，すべる石を足でふまないようにして歩きました。そして，ながれてきたボールをとりました。でも，ひっくりかえってしまいました。ふくは，ぜんぶびしょぬれになって，あさぶらがぬげてながれていってしまいました。わたしはちいとないたけど，あきらめてなかなんだ。

わたしは，なんでボールは川にとまってしまうんかなあ，おかしいなあと思いながらかえった。からだじゅうは，ちょっとつめたかった。

家へかえると，おかあさんはよその人とはなしをしておられた。わたしはおかあさんにだまっておふろへいって，ぬれているふくなどをぬいだ。水でぬれているので，シャツなどはぬぐのにくろうした。いもうとが，

「ねえちゃん」

と，いったけど，わたしは，なんにもいわなんだ。そして，さっさとぬいだ。わたしのからだは，とってもつめたかった。こおりのようにつめたかった。[6]

・あわててはしっていったんでしょうね。

・どんな川か，川のようすもかくといいね。

・ないたこともかくさずかいているのがいい。

・なぜボールは川にとまってしまうんかなあとかんがえてみたのはいいですが，とまっているようすを，もう少しよく見たらわかるのではないかなあ。

・ボールがひろえてよかったね。

作文の持つ長所・短所の具体的な指摘とともに，書き手の児童に対する共感・語りかけが記されている。

また，文末に添えられている評語は，次のようなものである。

あつい　　小林ひでき

学校かえりかけ，
せなかがあつうて，やけどしよった。
ぼくは，
「ああつう」
というて，かえった。

※やけどするくらいあつかったのですね。あせもでたでしょう。[7]

テスト　　藤永なるみ

さんすうのテストをみせた。
おかあさんは，おこった。おかあさんが，
「もっと，ようせなあかんぞ。」
と，いうたった。
※わるいテストでも，みせたのはえらいですよ。こんどはがんばってね。[8]

ここでは，表現についてはふれられず，共感・語りかけだけが記されている。
おもに，児童から任意に提出された〝日記〟の中の作文によって，多様な指導がなされている。
黒藪豊子氏は，このような生活文指導によって，児童相互に，一見平凡な日常生活に目を向けさせ，お互いの生活の中にある問題をとらえさせようとする。それがまた，児童のものの見方・表現の仕方の指導ともなり，取材範囲を広げる指導にもつながっていった。
また，ここで取り上げた文集「どじょっこ」「ことり」は，それぞれ，第1号の冒頭に「ぼくのねがいわたしのねがい」「先生へ」という〝1枚文集〟がおかれている。これは，文集を中心とした教育実践のはじめに，まず，児童に表現（作文）への意欲を持たせ，さらに，学級の中に，自由にものがいえる雰囲気を作るためのものと考えられる。
このような，文集の第1号の冒頭に，願い・要求・意見等を取り上げた〝1枚文集〟を置く構成は，黒藪豊子氏の刊行された文集のうち，2年生以上の文集のすべてに共通している。
また，「どじょっこ」の「(2)・5時間目のはじまるチャイムがなった」「(4)・計算のしかたをかいてみましょう」，「ことり」の「(4)・アイスクリーム」は，（他の〝1枚文集〟のほとんどが，任意に提出された〝日記〟によっているのに対し），すべて，題を与えて書かせたものである。これらの，課題による〝1枚文集〟は，いずれも，文集を中心とした教育実践のはじめられた，各学年の，比較的早い時期に取り上げられている。これは，学級の児童に，同じ素材を取り上げても，個性―思い方・考え方・感じ方―によって，表現の仕方に違いがあることに気づかせようとしておこなわれたものと思われる。
「どじょっこ」の「(2)・くわしく書こう」には，教師の指導によって書き直した作品が，書き直す前の作品とならべて，次のように，取り上げられている。

（書き直す前の作品）
たつお君とぼくと弟のまさはる君と，いっしょにすて犬をすてにいきよった。山にいきよって，しんどうなって休んどう間に，ぼくとたつお君と家に帰って，おかしをもって家を出よったら，おとうちゃんがきたって，
「何しにいくんや。」
言ったったで，ぼくは，
「犬にえさをやりにいくんや。」
と言って，行こうとしたら，おとうさんが，
「犬がしんだら，たましいがくるで。」
と言ったった。それで，ぼくらはこわくておかしをたべてしまいました。
そして，ぼくは，弟とまさはる君をよんで，いっしょに帰るとちゅう，たあきちゃんにあってそのことを全ぶはなした。
おとうさんの言ったのはほんとうか，書いてください。

（書き直した作品）
　ぼくが，自てん車にのってあそんでいたら，まさはる君と，たつお君が，犬をひきずりながらきた。その犬は小さい白い犬だった。
「なにしよんどい」
いうと，
「犬すてにいきよんや。」
いうた。それでぼくもついていった。山の方へ行きよったら，しんどうなったで，
「ちょっと休もい。」
いうて休んだ。ぼくは，
「そのあいだにおかしもってくらあな」
いうて家へかえった。たつお君もきた。家へはいっておかしをもって出よったら，おとうちゃんがきたって，
「何しにいくんや。」
言うたった。ぼくは，
「犬にえさをやりにいくんや。」
言うていこうとしたら，おとうさんが，
「犬がしんだら，たましいがくるで」
と，言ったった。ぼくらは，
「うそや，うそや。」
いうた。それでも，こわくなっておかしをたべてしまいました。それから，まさはる君らのところへ行って，
「犬が死んだら，たましいがくる，いうたったぞ」いうた。まさはる君らも，
「ほんまかいや。」
いうた。ぼくは，
「もう，くろなったで，あんなもんほっとこいや」
いうた。そして，犬を山のふもとの方へほりなげた。犬は，キャンキャンないた。
かえるとちゅう，たかあきちゃんにあったので，今までのことを全ぶはなした。
ぼくは，家へかえってからも，ほんまにたましいがくるんだろうかと，思った。おとうちゃんが言ったのは，ほんとうか書いてください。[9]

　この2つの作品をならべたあとに，黒藪豊子氏は，次のような〝評語〟を記している。

　どこがどんなにくわしくなったでしょうか。
　はじめの文とくらべてみましょう。
　人によくわかる文をかくには，よく思い出すということが一番ですね。
　・いつごろ　・どこで　・だれと　・その時のようすは　・その時，言ったことは　・その時思ったことは…と，いうように。
　めんどうくさがらずに書いてください。
　話したことは，前より多くなりましたね。

でも，まだ足りない気がします。

「犬が死んだら，たましいがくる，いうたったぞ」と，まさはる君たちにいった時，もっと，いろいろなことを話していると思うのです。そこを書いてほしかった。というのは，ここがだいじなところだと思うからです。[10]

児童作文の持つ，表現の不十分な点を，〝脚注〟という形で指摘するだけではなく，それを改めることによって，作文がどのようにかわるのか，が，具体的に示されている。

このような〝書き直し〟の指導は，「どじょっこ」以外にも，8例がみられ，黒藪豊子氏の文集を中心とした教育実践の特色の一つといえる。

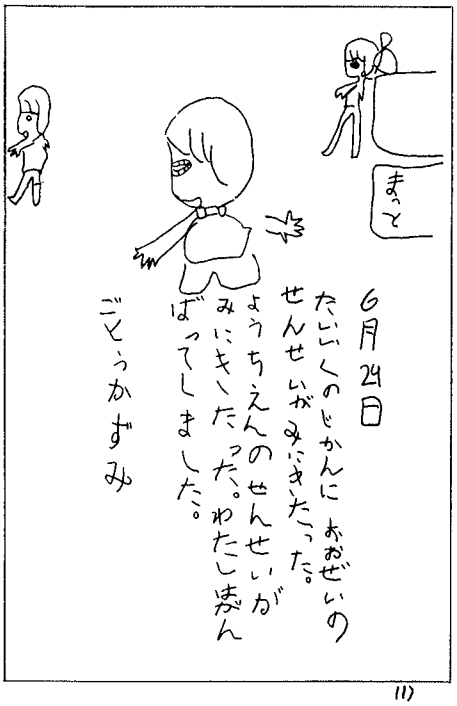
三

黒藪豊子氏が刊行された文集18種類71冊のうち，6種類17冊が1年生を対象としたものである。

いま，これらの1年生を対象とした文集のうち，「あかいほっぺ」を取り上げ，1年生・入門期の文集のあり方について，考察を加えたい。

文集「あかいほっぺ」は，3号まで刊行されている。第1号（昭和46年〈1971年〉8月3日刊）は，38名の児童の書いた絵日記（4月7日から7月17日までのもの）から，1人2編ずつを取り出し，印刷・製本したものである。

児童の絵や文字をそのままに，下のような〝絵日記〟が76ページにわたって掲載されている。



(1)

(2)

この「赤いほっぺ」第1号は，「かきはじめた子どもたちの記念」[13]として刊行されたものである。この第1号の刊行までに，すでに，第2号に合冊されている〝1枚文集〟5冊のうちの3冊が作られている。

「あかいほっぺ」第2号（昭和46年〈1971年〉12月20日刊）の目次は，次のようになっている。

(1)・おしゃべり・ひとりごと
(2)・せんせいへ
(3)・むねがどきっとしたこと・かなしかったこと・おどろいたこと・ふしぎだなあとおもうこと
(4)・あさがお
(5)・どんなことをかけばいいのかな

上の目次のうち，「(1)・おしゃべり・ひとりごと」から「(3)・むねがどきっとしたこと…」までは，児童のつぶやき・語りかけ等を，教師がメモし文字化した〝口頭作文〟である。

「(2)・せんせいへ」には，次のような〝口頭作文〟が掲載されている。

くさいうたら
たねまかへんのに
はえてくるんやな　　〈よこのなおみ〉[14]

せんせいのおべんとう
せんせいがつくったんやろ
そんなら
たのしみないなあ　　〈こばやしゆか〉[15]

黒藪豊子氏は，このような，児童のつぶやきや語りかけを文字化することの意義を，次のように述べている。

子どものことばをとらえる仕事，それは，子どもをはなれてはできません。これは，文章表現指導のもとであるとともに，教育の原点でもあると思います。[16]

このような，児童の話しことばをとらえ文字化することと並行して，絵日記の指導がおこなわれる。

〝口頭作文→絵日記→日記〟という形でその指導がおこなわれているため，絵日記や日記にみられる児童の文章は，型にはまらず，のびのびとしたものになっている。

10月4日　　うえむらみほ
きょう　ゆみちゃんと　うしをみにいった。
「うしのはなにするやつ　いたいんや。」
と，おばちゃんが　このまえ　いうてくれたった。
ゆみちゃんと　はなのところをみると　あながあいとった。わたしが　あのうしだったら　ない

とうだろうな。つのが　はえようとこも　くくっとったった。うし　いたいだろうな。[17]

11月26日　　いわはらゆか

きょう，がっこうに，三人でのこりました。あけみちゃんが，ほうびに，えかきちょうをもろたったで，わたしが，

「かかしてな。」

と，いうた。そやけど，かかれなんだ。わたしは，がまんした。そして，そとへでた。すべりだいでちっとまあそんでから，かえった。のこったのは，二かいだけですよ。[18]

生活の１コマが，ありのままに，素直にのびのびと表現されている。

このような，児童が文字を修得する以前から文集を用いておこなわれる入門期指導は，「どんぐりころころ」（昭和33年〈1958年〉度）以降の１年生を対象とした文集―「あかいほっぺ」「ちいさいなかま」―に共通してみられる。

「どんぐりころころ」よりも前に刊行された１年生を対象とした文集―「ことり」「おともだち」「おひさまの子」―は，いずれも，いちおうの文字修得を終わった段階で，文集の刊行が開始されている。そのためか，これらの文集に掲載されている児童作文には，次のような，型にはまったものが多くみられる。

10月22日　　かじ　　うめむらあやこ

かじがいきました。おおぜいひとがいきました。

はようにいきました。おおぜいがいきました。[19]

12月４日　やきいも　　しおたにやすこ

ゆうがた，ふろたきをした。

いもをやいた。

いいにおいがした。

たべたら，おいしかった。[20]

上の作文は，いずれも，先に取り上げた「あかいほっぺ」所収作文とほぼ同じ時期（１年生２学期）に書かれたものである。

ここに，１年生の入門期におこなわれた口頭作文指導の意義―型にはまらず，自由にのびのびと作文を書かせるための―を，改めて，見い出すことができる。

四

黒藪豊子の手になる文集（18種類71冊）に掲載されている児童作品4722編のうち，児童詩は，その46％にあたる2171編も収められている。このことは，黒藪豊子氏が，児童詩の指導を重視し，文集にできるだけ取り上げ指導しようとしたことによると思われる。

黒藪豊子氏は，児童詩教育の意義を，次のように述べている。

おとうさんおかあさんへ

詩なんて書かせて何になるんだろう。そんなことするより，漢字の練習でもさせてもらった方がいい…なんていわれる方があるかもしれません。
そういう方も，まず，子どもの書いたものを読んでみて下さい。
詩は，感動の表現です。心の叫びです。生きている人間の声です。
低俗で悪質な文化がはびこり，真に美しいものや正しいものが見失なわれていくこのごろだから，わたしは，詩の教育を大事にしたいのです。[21]

また，このような立場から，１年生入門期の児童詩教育について，次のように述べている。

子どもたちのおしゃべりやひとりごと，叫びをきいていますと，それがそのまま詩だと思わせられるものが多くあります。
小さい子どもたちは，それだけ物に感じる心が強いともいえましょう。ですから児童詩指導のはじめには，このことを忘れてはならないと思っています。[22]

黒藪豊子氏は，児童の「おしゃべりやひとりごと，叫び」を取り上げるところから１年生入門期の児童詩教育を開始する。児童の「おしゃべり…」は「感動の表現，心の叫び…」であり，そこに「そのまま詩だと思わせられる」ものを見い出すからである。
「あかいほっぺ」第１号には，次のような「おしゃべり」が文字化され，取り上げられている。

○　　ふじいさゆり
せんせい
これ，
あさおきたらなっとった。
みずむしいうて，
この中に，
むしがおるんやろうか。[23]

○　　やましたかずこ
くまぜみや，
あぶらぜみや，
みんみんぜみや，
ひぐらしや，
ようけ，おらあ。
１ぽんの木に，
10ぴきぐらい，おらあ。[24]

黒藪豊子氏が，このような「おしゃべり…」を文字化し，文集に取り上げることによって，児童もまた，自ら，次のような「おしゃべり…」を書いている。

○　　いわはらじゅんこ

べんきょうしよったら，
せんせいが，ごっついこえで，
「あけみちゃん。」
いうたった。
びっくりした。
ほんとに，びっくりした。
せんせい，
そんなごっついこえ，
ださんときな。
みみ，
つんぼになるで。[25]

○　　たちばなしんじ
たこをもってはしってみると，
たこが，ぜんぜん，あがらへんだ。
もういっかい，はしった。
せんどせんどはしってもあがらへんで，
ぼくは，ごがわきました。
たこにおこりました。
「おい，きんたろう，おまえ，なんであがれへんのん。」
「かぜがふかんでか」。
と，いいました。
ぼくは，
「かぜ，かぜ，ふけ。」
と，いいました。[26]

上の「おしゃべり…」のそれぞれに対して，黒藪豊子氏は，次のような評語を記している。

○じゅんこちゃんへ
じゅんこちゃんのいうとおりやなと，おもいましたよ。みみ，つんぼになったら，こまるものね。[27]

○しんじくんへ
たこあげは，いいねえ。ぐんぐんあがるたこをみていると，きもちいいもんね。
でも，しんちゃんのたこは，あがらなかったの。それで，たこにおこったの。
「かぜ，かぜ，ふけ」といっている，しんちゃんのようすが，うかんできて，とてもたのしいです。[28]

ここに取り上げられている「おしゃべり…」は，児童詩の作品として，必ずしも優れたものとはいえない。しかし，黒藪豊子氏は，これらの「おしゃべり…」の中に「感動の表現」「心の叫び」を見い出し，それらを積極的に取り上げている。

このような，文集を中心とし，「おしゃべり…」を発展させていく児童詩教育の方法は，黒藪豊子氏の指導された他の学年の文集にも，共通してみられる。

黒藪豊子氏が指導され，文集に掲載されている児童詩は2171編を数える。これらの児童詩を代表するものとして，次の3編を取り上げたい。

かさ　　1年　ふじいさゆり

かさこうてもうたら，
ぜんぜん，雨がふらへんのや。
おこった。
あしたになったら，ふるかふるかとまっとった。
でも，ふらなんだ。
あさってには，ふるかとまっとった。
でも，ふらなんだ。
しあさってにはふるだろう。
と，かみさんにいのった。
でも，まだ，ふらなんだ。
もう，かんかんにおこった。
でも，まだ，ふらなんだ。
ほんまに，いつになったら，いいかさがさせるんじゃあと，おもった。
また，日がたった。
日よう日になっても，
火よう日になっても，
水よう日になっても，
どうしても，雨がふってくれないんです。
金よう日になって，
やっと，ふってくれた。
雨，きらいやとおもとったけど，
すきになった。
かささして，あるいた。[29]

おとうさんの手　　3年　梅岡かおる

おとうさんの手は，きたない手だ。
おとうさんは，木や石など持つから，手があれる。
おふろにはいったおり，
おふろをあらうもので，
ぼく（弟）と，わたしとでいっしょに石けんをつけてあろたげた。
おとうさんは，
「いたいがいやい。もう水かけいやい。」と
もんくいよってみたいだった。
わたしは，あろたげんとこか思った。

が，やっぱりあろたげた。
おとうさんは，
「きれいになった。」
と，よろこんだった。[30]

　　木からおちた　　4年　片山満
木にのぼった。
おりがけ，足がすべって転落した。
ぼくは，声を出さなんだ。
下まで落ちて，
「ほほほほほ……。」
と，わらった。
くそう！と思って，
もっていたアイスクリームにおこった。[31]

ここに取り上げた3編の児童詩には，それぞれ，自由でのびのびとした表現の中に，個性に基づくイメージとリズムとの，独自の世界を見い出すことができる。

これらの児童詩は，黒藪豊子氏が，その，文集を中心とした教育実践でめざそうとした，到達点を示すものといえよう。

五

以上，黒藪豊子氏の作文（綴り方）教育実践を，氏の刊行された文集を中心として，考察してきた。

黒藪豊子氏が，教職に就いておられた26年間，文集の刊行を一度も途絶えることなく続けられたこと，および，その間に，18種類71冊（総ページ数4214ページ）もの文集を刊行されたことは，注目に価する。

これらの，文集を中心とした作文（綴り方）教育実践のうち，もっとも優れた成果となっているのは，1年生入門期の，口頭作文を重視し，絵日記，日記へと発展させる指導である。

さらに，文集に，児童の「おしゃべりやひとりごと，叫び」を取り上げることから開始される児童詩教育の実践には，学ぶべきものが多い。

黒藪豊子氏の刊行された文集一つ一つの持つ実践資料としての価値を，文集を中心とした教育実践の成果を示すものとして，さらに明らかにしていきたい。

〈注〉

1)，文集「せんちょう」は，宍粟郡繁盛小学校千町分校（1・2年生を黒藪豊子氏が担任し，3・4年生を黒藪次男氏が担任する複式2学級の分校である。5年生以上は，本校へ通学した。）で刊行された，分校の文集である。「せんちょう」の中に，1・2年生に対する黒藪次男氏の指導がみられることから，今回の研究の対象とはしなかった。

2)，この年度は，学級担任を持たず，〝作文〟の専科教員として文集を刊行した。

3)，文集「あかいほっぺ」第2号（昭46・12・20）「あとがき・お父さんお母さんへ」　96ぺ

4)，「生活綴方と文集づくり」黒藪豊子（『生活綴方の基礎講座・低学年編』〈昭51・8・10新評論〉所収）　207ペ
5)，各文集の見出しのことばだけをとり出した。ただし（ ）内は引用者がまとめたものである。
6)，文集「ことり」第2号　33～34ペ
7)，文集「ことり」第1号　54ペ
8)，　同　上　55ペ
9)，文集「どじょっこ」第1号　19ペ～21ペ
10)，　同　上　22ペ
11)，文集「あかいほっぺ」第1号　63ペ
12)，　同　上　17ペ
13)，　同　上　「あとがき」　82ペ
14)，文集「あかいほっぺ」第2号　8ペ
15)，　同　上　10ペ
16)，　同　上　「おとうさんおかあさんへ」　11ペ
17)，　同　上　44ペ
18)，　同　上　75ペ～76ペ
19)，文集「ことり」第1号（昭29・3・14）　3ペ
20)，　同　上　21ペ
21)，文集「えんぴつ」第2号（昭47・12・27）　20ペ
22)，文集「あかいほっぺ」第2号　4ペ
23)，　同　上　8ペ
24)，　同　上　8ペ
25)，文集「あかいほっぺ」第3号　41ペ
26)，　同　上　74ペ
27)，　同　上　42ペ
28)，　同　上　42ペ
29)，　同　上　92ペ～93ペ
30)，文集「えんぴつ」第3号　41ペ
31)，文集「とんぼの目」第1号　38ペ

〈付記〉
本研究にあたり，広島大学教育学部国語教育研究室には，貴重な資料をお貸しいただき，数々のご配慮をたまわった。また，黒藪豊子氏には，直接お話をいただき，ご助力をいただいた。記して深く感謝の意を表したい。（昭58・4・25記）

（昭和58年4月30日受理）